

財團統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ護妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見シ又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セシト欲シ 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

憲ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ賛同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本國畧則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

孟蘭盆經に就て

此經は其の内容に於て、あまり稱揚すべき價值のある經典ではないが、古來から我國の上下に普及されてゐる點から、本多上人は全譯するやうにとの事で紹介されて居る。則ち人皇第三十七代齊明天皇の三年七月十五日に飛鳥寺で孟蘭盆會を修され、同五年には諸國に勅して此經を講ぜしめ、大に國民道德の涵養に資し、其後 聖武天皇の天平五年七月六日、禁裡に於て修法さるゝのみならず、更に令して毎年七月十五日孟蘭盆會を全國的に營ましめられた事が日本書紀に見えて居る。

そこで此の經一卷は別項の如く極めて簡結で、別段に難解の處もない。所詮目連尊者の孝心と、衆聖の協力と、三寶の供養と、自己の反省と、回向の思想等が盛込されてゐる。

日蓮聖人晩年の御遺文中にも孟蘭盆御書といふのがあつた。それに依れば目連尊者の孝養は、小乘阿羅漢の分際では悲母の餓鬼の苦難は拔濟されたが、未だ成佛への大善に到らない、其後法華經を信ずることによつて始めて徹底せる孝養となつた旨が懇説されてゐる。是れは信仰上は勿論、道義觀に於ても極めて重大な事柄と思ふ。

此經の異譯に「報恩奉盆經」一卷ある。共に全譯抽出された。宜しく御精覽を望む次第である。

佛說孟蘭盆經

第十套の七

西普月氏三藏竺法護譯

是の如く聞きき。一時、佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在ましき。大目乾連始めて六通を得父母を度して乳哺の恩を報ぜん欲し、即ち道眼を以て世間を觀視せり。其亡き母を見るに餓鬼の中に生じて、飲食を見ず、皮骨連立す。目連悲哀して即ち鉢に飯を盛り、往いて其母に餉^{くわ}れり。母鉢の飯を得、便ち左手を以て飯を障へ、右手に飯を搏り食はんとす。未だ口に入らざるに化して火炭と成る。遂に食することを得ず。目連大に叫び悲號涕泣し、馳せ還りて、佛に白して此の如きことを具陳せり。

佛の言はく、汝が母は罪根深結なり、汝一人の力にては奈何ともする所に非らず、汝が孝順の聲天地を動かすと雖も、天神、地神、邪魔、外道の道士、四天王神も亦奈何ともする能はず、當に十方諸の衆僧、威神の力、乃ち解脱を得せしむべし。吾れ今當に

【六通】神足通、天眼通、天耳通、他心通、宿命通、漏盡通。
【道眼】さとり之眼、即ち天眼のこと。

汝が爲めに救濟の法を説いて、一切の難をして皆憂苦を離れ罪障を消除せしめん。佛 目連に告げたまはく、十方の衆僧を七月十五日僧自恣の時に於て、當に七世の父母及び現在の父母の厄難中の者の爲めに、飯と百味、五果を具し、盆器に汲灌して、香油に錠燭し。狀に臥具を敷き、世の甘美を盡し以て盆中に著け十方大徳の衆僧を供養すべし。此の日に當つて、一切の聖衆、或は山間に

【自恣の時】 雨安居の竟りし日なり、自恣とは、恣に己が所犯の罪を擧發せしめ悔念懺悔するをいふ。
【百味】 數多の好味のこと。
【五果】 桃李、瓜梨、胡桃、松柏子、豆類の如きもの。
【和羅飯】 自恣日に三寶に供養する飯食。

在つて禪定し、或は四道果を得、或は樹下に經行し、或は六通自在にして聲聞、緣覺を教化し、或は十地の菩薩、大人、權現の比丘は、大衆中に在つて、皆同一心にして和羅飯を受鉢せん。清淨戒を具し、聖衆の道、其徳汪洋たらん。其れ此等の自恣僧を供養すること有らば、現在の父母、七世の父母、六種の親屬は三塗の苦より出で、時に應じて解脱し、衣食自然なることを得ん。若し復た人有つて父母現在の者は、福樂百年ならん、若し已に亡べば七世の父母天に生じ、自在に化生して天の華光に入り、無量の快樂を受けん、

時に佛 十方の衆僧に救したまはく、皆先づ施主の家の爲めに呪願し、七世の父母禪定の意を行じ、然して後に食を受くべし、初め盆を受くる時、先づ佛塔の前に安在し衆

僧呪願し竟つて、便ち自ら食を受くべしと。爾の時に目連比丘及び此の大會の大菩薩は皆大に歡喜す。而して目連の悲み啼泣する聲釋然として除滅せり。是の時に 目連の其母即ち是の日に於て一劫餓鬼の苦を脱ることを得たり。

爾の時に 目連復た 佛に白して言さく、弟子所生の父母は、三寶の功德力と衆僧の威神力を蒙ることを得たり、故に若し未來世一切の佛弟子の孝順を行ぜん者も、亦應に此の盂蘭盆を奉じて、現在の父母、乃至七世の父母を救度すべきこと爾かるべしと爲んや、否や。佛の言はく大に善し、快問なり、我れ正に説かんと欲す、汝今復た問へり。善男子よ若し比丘、比丘尼、國王、太子、王子、大臣、宰相、三公、百官、萬民、庶人有つて、孝慈を行ぜん者は、皆應に所生の現在の父母、過去七世の父母の爲めに、七月十五日、佛歡喜の日、僧自恣の日に於て、百味の飲食を以て 盂蘭盆中に安じて十方の自恣僧に施すべし。乞ひ願くば便ち現在の父母をして壽命百年、無病にして一切苦惱の患なく、乃至七世の父母をして餓鬼の苦を離れて天人中に生るることを得て福樂極まることなからしめんと佛 諸の善男子、善女人に告げたまはく、是の佛弟子孝順を修する者は應に、念念の通常に父母の供養乃至七世の父母を憶ふて、年年七月十五日常に孝順の慈を以て 所生の父

母乃至七世の父母を憶ひ、爲めに盂蘭盆を作して、佛及び僧に施し、以て父母の長養慈愛の恩を報ずべし。若しは一切の佛弟子は應に是の法を奉持すべしと。爾の時に目連比丘四輩の弟子、佛の所説を聞いて歡喜奉行しき。

自身佛にならずしては父母をだにもすくい難し、況や他人をや。しかるに目連尊者と申す人は法華經と申す經にて正直捨方便とて、小乗の二百五十戒立ちどころに投捨てて 南無妙法蓮華經と申せしかば、やがて佛になりて名號をば多摩羅跋耨檀香佛と申す、此時こそ父母も佛になり給へ。故に法華經に云く、我願既に滿ち衆の望も亦足りぬ云云。目連が色身は父母の遺體なり、目連が色身 佛になりしかば、父母の身も又佛になりぬ。……惡の中の大惡は我が身に其の苦をうくるのみならず子と孫と末七代までもかかり候けるなり。善の中の大善も又かくのごとし、目連尊者が法華經を信じまいらせし大善は我が身、佛になるのみならず父母佛になり給ふ。上七代、下七代、上無量生、下無量生の父母等存外に佛となり給ふ。乃至子息夫妻所從檀那無量の衆生三惡道をはなるのみならず、皆初住妙覺の佛となりぬ。故に法華經の第三に云く、願くは此功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に佛道を成せん、云云。——日蓮上人盂蘭盆御書——

報恩奉盆經

第十套の七

闕譯附東晉錄

六

聞きしことは是の如し、一時、佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在ましき。大目犍連は始めて六通を得、父母を度し乳哺の恩を報ぜん欲し、即ち道眼を以て世界を觀視し、其の亡母を見るに餓鬼中に生じて飲食を見ず、皮骨相連柱す。目連悲哀し即ち鉢に飯を盛り往いて其の母に餉る、母鉢の飯を得て便ち左手を以て飯を障へ右手もて搏食するに、食の未だ口に入らざるに化して火炭と成り遂に食することを得ず。目連馳せ還りて、佛に白して具さに陳ぶること此の如し。

佛、目連に告げたまはく、汝の母は罪根深結にして汝一人の力の奈何ともする所に非らず、當に須らく衆僧威神の力を須つて乃ち解脱を得べし。吾れ今當に救濟の法を説くべし。一切の難をして皆な憂苦を離れしめん。佛目連に告げたまはく、七月十五日當に七世の父母厄難中の者の爲めに炒飯五果を盆器に汲灌し、香油に庭燭し、狀榻臥具を具し、世の甘美

を盡し以つて衆僧に供養すべし。此の日に當つて一切の聖衆或は山間に在つて禪定し、或は四道果を得、或は樹下に經行し、或は六通飛行を得、聲聞、緣覺を教化し、菩薩大人權示の比丘は大衆中にあつて皆共に同心に鉢に和羅を受く。清淨戒を具し、聖衆の道、其徳は汪洋たり。其れ此等の衆を供養すること有らば、七世の父母、五種の親屬は三塗を出づることを得て應時に解脱し衣食は自然なり、佛、衆僧に敕して當に施主の家、七世の父母の爲めに禪定の意を行じ、然る後に此の供を食すべし。目連比丘及び一切の衆は歡喜奉行しき。

暑中
御伺

財團統一團幹部
法人統一誌編輯同人

聖訓摘要

本多日生

上野殿御返事

民の心不孝にして父母を見る事他人のごとく、僧尼は邪見にして狗犬と猿猴とのあへるが如し。慈悲なければ天も此の國を守らず、邪見なれば三寶にも捨てられたり。(縮刷遺文録)

これは段々人心が墮落して、親を親とも思はず、坊さんも利益の爲に動くやうになり、慈悲の心も無く邪見の者になつたから、天にも佛にも捨てられるやうになつたのであるといふ事をお書きになつた。これも大事な教訓で『立正安國論』の御趣旨は、唯だ法華經々々々とのみ言ふのではない、勿論法華經は大事だけれども、世の中の人心が墮落して、民の心は不孝になり、坊さんは邪見になり、慈悲の心もなければ信仰の心もないといふ、世の中の頽廢墮落といふものが遂に國家を誤ることになるのである。それは一番大事な所に法華經があるけれども、唯だ法華經々々々と言つて、政治が腐つても構はない。法華經で國家は安泰に行くといふ、それでは將來の人は承服しないものである。ちゃん人と人が聞いて、

『成る程』といふやうにならなければいかぬ、唯だ迷信のやうな事をいつて、大本教の豫言の出來損ひ見たやうなことを言つて居つてはいかぬ。日蓮聖人のこの教は其處のところをはつきり言うてお居でなるので、『慈悲なければ天も此の國を守らず、邪見なれば三寶にも捨てられたり』といふことは、如何にも適切なる教訓と思ふのであります。

千日尼御前御返事

譬へば女人の一生の間の御罪は、諸の乾草の如し。法華經の妙の一字は小火の如し、小火を衆生につきぬれば衆生焼け亡ぶるのみならず、大木大石みな焼け失せぬ、妙の一字の智火以て此の如し、諸罪消ゆるのみならず、衆生かへりて功德となる、毒藥變じて甘露となる是なり。(縮刷遺文録)

これは法華經を信すれば、女が假に罪があつたとしても、皆消へてしまふ、澤山の乾草を積んである所に火を點ければ、小さな燒寸一本からでも皆焼けてしまふやうに、法華經の妙の一字に依つて女人の罪は皆消へ去るものである。唯だ消へるばかりではない、不思議なことには毒藥變じて甘露となる、滋柿變じて甘柿になるといふやうな譯で、滋柿の滋を除つてしまつて甘柿にするのではない、滋その儘が一晩の内に甘柿になるのである。吾々の作つた罪を一々切り捨てなくとも、今迄罪でありしそのものが

皆功德に變るといふ、其處が大事な所で、これが下手をやると又をかきな事になる。「それは澁柿でも澁が澤山ある方が餘計甘くなるのだから、今は澁を溜め居るのぢや、終ひに行つて一遍に甘くなるのぢや」といふやうなことになる、自分が悪い事をいくらやつても宜いといふことになるが、さういふ意味ではない。此處が大事の所である。許された場合は確かに澁が甘くなるといふ筋合があるのである。そこでちよつとその一つだけをいうと——餘りいふと却つていけない、餘り澁柿が甘くなるといふ事はかり教へると却つていけないからちよつと申すと、女なら女に愚癡といふものがある、愚癡といふのは子供なら子供の話を仕かけたならば、何處までもその話ばかりする、「モウ逆もこの病氣は癒らぬ」と醫者が言つても「癒らぬ」といつてもそんな事はない、どうしても癒さなければならぬ」といふやうな事をいつて、何處でもその事を言ふから、そこで女は愚痴ッばいといふことになる。或は腹を立てるといふことにしても、子供が病氣であるのに親父が餘所に行つて晩くでも歸つて來ると「妾はこれだけ子供の事を思つて居るのに、あなたは何處をグヅグヅ歩いて居るんです」と言つて腹を立てる、腹を立てるといふけれども、それは能く考へて見ると皆善い事である、母親が子供の癒らぬ病氣でも癒さうといふ精神が一轉すれば、佛の慈悲となつて、救ひにくいこの罪の深い吾のやうな者でも、どうしても救はうといふ精神になる、母親の慈悲といふものをちよつと一轉すれば如來の慈悲である。腹を立てるといふても素々子に對する親切といふものと、親父が放つて置くといふこととの間に起つた齟齬であるから、考へ

て見るとさう悪い事ではない、段々さういふ風にやつて行くと、ちよつと狂つて居るだけで、その事その者が大したものではないから、今迄の澁が一轉すれば皆功德になる、少しのけぢめの違ひといふものが罪といふことになつて居るのだから、そんなに怖いものではないといふことになる。けれども法華經の信仰にまで來なければ、それは皆罪となつて自分を苦しめるものであるからこの正法に歸依すれば罪障懺悔と言つて、丁度霜が日の光を受けて消えるが如くに、朝起きて見た時には屋根の上も地の上も草も一面に眞ッ白に霜が降りて居るものが、暫くして太陽の光に會へば、一つの太陽に依つて一切の霜が消へてしまふが如く、どの位澤山の罪でも正法に歸依する事に依つて皆消え去るといふことを法華經は教へて居る。この意味を能く考へて、新しく罪を作るといふ事に就ては宗教は之れを許さないけれども今迄に作つた罪を打消すといふ事に就いては、綺麗さつぱり少しも残さぬ、八分までは消へたけれども二分は残るといふやうなことはない、どの位澤山あつても一遍に消へてしまふ。丁度西洋洗濯にやるやうなもので、少し汚れて居つた者も非常に汚れて居つた物も、皆一緒にに入れて或る薬を入れて洗濯すると、皆一遍に新しい物のやうになつてしまふ「あんな穢ないハンカチがこんなに眞ッ白になつた」といふやうに、すつかり洗ひ去つて新しき生活に移すといふのが宗教である。だから掌を合せて南無妙法蓮華經と唱へるといふことは、一切の罪障悉く消滅して、洵に純白なる新しい白い毛布のやうになつて塵もなければ穢れもないといふことになる、さういふ風に考へて置かなければならぬ「どうせ私はもう

好い加減汚れて居る、古いハンカチみたやうな者でありますから、もう駄目です」といふ風に考へると段々汚れて来る「イヤ、自分は新しい毛布である」といふことになれば、ちよつと汚點がついてもいかにぬといふので注意するやうになる。であるから宗教は信仰の始めにすつぱりその人を新しくするといふことを大事な點として居るのであります。

四條金吾殿御返事

九郎太郎殿御返事

この中には別段御紹介する所が無い。

兵衛志殿御返事

今年は餘國はいかんが候らめ、この波木井(身延)は法に過ぎて寒じ候、古き老どもに同ひ候へば、八十、九十、一百になる者の物語り候は、すべて古へこれほど寒き事候はず、此の庵室より四方の山の外十町二十町、人通う事候はねば知り候はず、近邊一町のほどは雪一丈二丈五尺等なり。この閏十月三十日雪すこし降りて候ひしが、纏て消へ候ひぬ、この月の十一日辰の時より十四日まで大雪降りて候ひしに、兩三日隔て少し雨降りて雪かたくなる事金剛の如し、今に消ゆることなし、晝も夜も

寒く冷たく候事法に過ぎて候。酒は凍りて石の如し、油は全に似たり、鍋釜は少し水あれば凍り

て割れ、寒いよいよ重なり候。(縮刷道文録)

これは如何にも身延山の非常に寒い有様が判かる、當時は非常に雪が降つたものであるが、段々今日のやうに人間が餘計になつて、山の樹を伐つてしまふと雪が減る譯でありまして、六百數十年前の身延などは今日よりもズツと寒いことであつたらうと思ふ。其處に日蓮聖人が御辛抱下さつた譯であるが、餘り寒いするからこの山を逃げ出さうかといふ事を次に書いて居られる、随分耐え難かつた譯であります。さうして又段々信者が寄つて來、信者の兄弟や身内がやつて來るといふやうな譯で、随分うるさくなつて困つたといふ事が書かれて居る。

人は無き時は四十人、有る時は六十人、いかに塞き候へども、これに在る人々の兄とて出來し、舍弟とてさしいてし來居候ひぬれば、可愛さに如何にも申し得ず、心には靜かに庵室むすびて小法師と我身計り御經よみ參らせんとこそ存じて候に、かゝる煩はしき事候はず、又年明け候はど何國へも迷んと存じ候ぞ。(縮刷道文録)

少い時でも四十人位、多い時には六十人位人がやつて來るモウさう來られてはうるさいからと言つて日蓮聖人を慕うてやつて來ても新しい者は入れないといふことにしやうと思へば「イヤ私は何某の兄であります」「私は何某の弟であります」と言つてやつて來るといふ、それが爲にどうも心靜かに庵室

に於て佛法の修行が出来ない、自分は小僧の一人も置いて、心静かに法華經の修行をしようと思ふ所に
大勢やつて来て中々煩はしい、さうして寒くて仕方がないから、年でも明けたならば何處かに逃げ出さ
うかと思ふと書かれた。如何にもこれは眞實なる實際の感じをお書きになつて居るので、當年を想ひ起
して恐れ入ることに思ふ、日蓮聖人を慕うて行くといふ事は有難い事だけれども、年老られて寒い所に
御座つても、いろ／＼法門の事を尋ねに來たり、又弟子を教へられたり、お祖師様の御苦勞といふ事を
思へば洵に恐懼に堪えぬことであります。

上野殿御返事

この中には別段抽出する所が無い。

可延定業書

定業限りありしかども、佛、法華經をかさねて演説して涅槃經と名づけて大王に與へ給ひしかば、身
の病忽ちに平愈し、心の重罪も一時に露と消へにき、佛滅後一千五百餘年、陳臣と申す人ありき、命
知命にありと申して五十年に定まりて候ひしが、天台大師に値ひて十五年の命を宣て六十五までをは

しき。其の上不經菩薩は更増壽命と説かれて法華經を行じて定業をのべ給ひき。彼等は皆男子なり
女人にはあらざれども法華經を行じて壽をのぶ。又陳臣は後五百歳にもあたらす、冬の稻米、夏の菊
花のごとし。當時の女人の法華經を行じて定業を轉することは、秋の稻米、冬の菊花、誰か驚くべき
されば日蓮悲母を祈りて候ひしかば、現身に病を癒すのみならず、四箇年の壽命をのべたり。今女人
の御身として病を身に受けさせ給ふ、試みに法華經の信心を立て、御覽あるべし。(續圓通文錄)
これは法華經に依つて定業を轉じたといふ事が説いてある、定業といふのは定まる所の果報はあるか
ら、極つた事は動かぬかといへばさうではない、定業能轉といつて能く變はるのである。極つたものは
動かぬといふことになれば、人間一生貧乏の者は貧乏、病身の者は病身といふことになるけれどもさう
ではない、定業は定つて居るけれども縁に依つて、之が變ずるといふのが佛教である。だからお釋迦様
は因縁の教といふものをお説きになつた、仮令壽命の定まれる者でも、信心をし衛生を大切にして行け
ば生き延るし、長生きする者でも衛生も守らず又信心もせぬといふやうな者は早く死んで行くといふ事
になるのである。定業々々といつてそれにのみ任す譯のものではない。之れを餘りに定業論に偏ると、
機械的になつて、人間はまるで現在に於て何の力もない操り人形みたやうになつてしまふ、操り人形の
芝居でもやるやうに、この人形が倒れやうが喧嘩をしようが、それは上に居る人が操つて居るのである
吾々が行つて人の頭をどづいた所が、自分が悪いのではない、之れを引張つて居る所の定業といふもの

が悪いのだ、操り人形が人を殺したからと言つて人形が上手だといふことはない、這つて轉げやうが跳ねやうが人形の問題ではない、上に居る人が上手か下手かといふ問題になる。神様の力や佛様の力を餘りに純他力に説くと、人間は操り人形になつてしまふ、親鸞上人の念佛ナンといふものは、この操り人形になつて居る。一切の物は鵜の毛ほども、毛筋ほども自分の力ではどうにもならぬものぢやといふ、だから人を殺しても無罪である、殺すといふのは自分が殺すのではない、業が殺すのである、操り人形の芝居である、殺したのはその人間が悪いのではないといふやうな事を書いて居るが、そんなものは佛教ではない、それは外道である、宿作因外道といつて、何でも皆過去の生に託けてしまふ外道である。佛はそれを非常に攻撃した、宿世になしたことが原因で一切の事が決まるといふのであるが、この宿作因の「因」といふものは、縁といふものを加へてこれが變化する、善き縁を持つて行けば善く變化するその縁といふものを佛教は尊んだのである、唯だ一切前の生の業にのみ任せたものではない。だから此處にある通り、日蓮聖人のお母さんが一度死なれたけれども、日蓮上人が祈られたことに依つて四箇年の壽命を延べられた、それも延べられる譯がある、日蓮聖人はその時法華經を以て一生懸命に祈られた。私は親の側に居つて親孝行が出来ない、併し親孝行の出来ないは自分の勝手に出来ないのではない、法華經を弘めるが爲に、これに依つて一切衆生を救はんが爲に親の側に居れない、自分は親の側に居りたい、今迄親の側に居つて親孝行が出来て居つたならば、親が死んでも仕方ありませんけれども、今迄一切衆生を思ひ、法華經を思ふが爲に親孝行といふことを犠牲にして比叡山に勉強に行つた、これからも親が蘇生へつたからといつて、親の側に給仕奉行は出来ない、親を捨て、法の爲め一切衆生の爲に旅立つ身である、せめては命だけでも戻して貰ひたいといふ事を祈つた。私が法華經の爲に親の側で孝行の出来ないこの志を憐れんで、親の壽命を増して載さたいといふことを願つて居る。實に親孝行の精神と言ひ、法に盡す精神と言ひ、洵に能くその意味合が徹つて居る、その祈りが應つてお母さんは蘇生されたのであります。日蓮聖人は茲に、女が法華經を祈れば病も癒り、命も延るといふ事をはつきり言つてお居てになる、これも大事な事である。唯だこれが迷信に行かないやうに注意しなければならぬ、今いふ日蓮聖人がお母さんを祈られるやうな、筋の立つ信仰をして行かなければならぬ譯であります。

念 告

開目鈔講座及び日曜清集は、八月中お休みと致します。
 但毎朝五時半より一時間の修法動行に、妙法華經が順次訓
 讀唱題されますから、随自御参加下さい。
 右特別に御通知は差上げませんから御諒承願ひます。

財法 團人 一 統 團

開目鈔講話

(第十講)

小林一郎

日蓮云く、日本に佛法わたりてすてに七
百餘年、但傳教大師一人計法華經をよめ
りと申をば、諸人これを用ゐず。

これは日蓮上人の平生の御主張でありまして、日本に佛教が渡つてから七百年ばかり経つが、その間に於て、法華經といふものはモウ聖德太子の時から既に弘つて居つたが、法華經の眞實の精神を世の中に憚るところなく弘められたのは傳教大師の時に始まる。斯ういふのであります。勿論聖德太子が法華經を尊ばれたのは申すまでもないことであります。

う。

ところが傳教大師の時になりましたと、屢々申すやうに、奈良朝の末までに六つの宗が日本に渡つて居りました。傳教大師の時になつては、傳教大師御自身が天台宗を弘められ、續いて弘法大師が眞言宗を弘められるといふやうな譯で、當時日本に八つの宗があるものでありますから、そこでその八つの宗の中で、法華經を中心として立て、居る教が最も勝れて居るものだといふことを明かにしなければならぬ譯であります。それで傳教大師に至つて初めて法華經が最も勝れた經であるといふことを説かれたといふのであります。

併ながらその事を日蓮上人が主張するけれども、誰もこれを信する者が無い。これはどうも世の中が念佛とか禪とかいふやうな方の信仰に傾いて居るのでありますから、日蓮上人のこの正しい主張を用ひる者が無い。

あの時はまだ佛教が日本に傳つてからあまり永い歳月が経ちませんので、別に何宗、何派といふものが無い。だからマア法華經全體に就ての説明を主にして居られたのであります。聖德太子のお書きになりましたのを見ますと、法華經が最も勝れた經だといふことは言はれて居るのでありますけれども、他の例へば華嚴經とか大日經とかいふやうなものに比べて見て、法華經が最も勝れて居るものであるといふやうな細かい説明は、聖德太子のお書きになつたものには無いのであります。これはマアその時分にはさういふ事を説かれる必要がなかつた譯であります。

但し法華經に云く、若し須彌を接つて、
他方の無數の佛土に擲け置かんも亦未だ
爲れ難しとせず。乃至、若し佛の滅後に
惡世の中に於て能く此經を説かん。是則
ち難しと爲す等云云。

それは併ながら急に日蓮がさういふ事を唱へ出し
ても世間が信じない、さうして却つて迫害が加へら
れるといふことは、モウこの法華經を弘め始める時
から既に覺悟したことである。何故ならばそれは法
華經の中にハッキリ言つてある。若し須彌山を接つ
て他方の佛の世界に擲げんとしても、それは難かし
いと云へない、併し佛の滅度の後の、世の中の惡
い者ばかり居る中で、この經を信じ、これを弘める
ことは難かしい。斯ういふ事を言つてある。

これは法華經のお話の時に出ました『六難九易』
といふことで、法華經の寶塔品の中にある言葉であ

りますが、法華經を世の中に弘めろといふことをお釋迦様が三度言つて居らつしやる。一番初めに末の世に生れてこの法華經を弘めることに力を盡せ、さうすればその功德は非常に大きいぞ、斯ういふ事を言つて居られるのであります。さうして二度目に又それを繰返して、誰かしつかりしてこの法華經を末の世に弘める者は無いかといふことを言はれ、それから三度目に又同じ事を繰返される。その二度目と三度目とのまん中に六難九易といふことが出て居るのであります。

それで六難といふのは、つまり法華經を信ずるとか、法華經を弘めるとか、人に説くといふことは、非常に骨が折れる、難かしいといふことを六つの點から説かれましたから、六難と言ふのです。さうしてその法華經を信じ、又法華經を弘める困難に比べれば、世の中で言ふ困難だとか、難かしいといふ事ぐらゐは物の數ではない、これはまだ一易しいと

ので、この法華經を末法の世に弘めろといふことを命ぜられる譯であります。

併ながらそれは易しい事ではない。若し法華經のやうな教が弘まらなくなつたらどうなるか、此の場合を考へて見る。すると、これを藥王品の中にハッキリ言つてある。後の五百歳、つまり末法の初めにこの法華經を世の中に弘めて、この閻浮提、即ち吾吾の世界に於て斷絶しないやうにしる。若し斷絶すれば『惡魔魔民』と言つて、非常に悪い奴が勢力を得て、世の中がまッ暗闇になつてしまふ。どつちにかなる。斯ういふ事を言つて居る。その所が非常に注意すべき點です。どつちにかなる。世の中が平和でありますとどつち附かずの生活をして居る、大多数の人といふものは、大して善い心持も有たないが、大して悪い料簡も出さないで、マアいゝ加減な所で一生経つてしまふ譯であります。ところが世の中が末になつて來て、社會が著しく險惡になると

いふので、世間で言ふ非常に難かしいといふ事を九つ挙げられて、それは難かしいと言つても、法華經を弘めることに比べればまだ一易しい、斯ういふので『九易』九つの易しい事と言はれるのであります。

それでこれは殊に注意すべき事なので、法華經を世の中に弘めるといふことの功德は非常に大きいものであります。世が末になつて來れば、ちようど人間の病が重いやうなものだから、餘程良い藥がなければ、世の中の總ての人を感化するといふ譯には行かない。病が軽い者には、極く易しい、普通の藥で宜いけれども、病が重くなれば非常に良い藥でなければいけないと同じやうに、世が末になつて來て社會が複雑になつて來ると、人生にはいろ／＼面倒な問題が起る。さういふ如何なる問題をも解決し得る教といふものは、それは佛様が本心を打込んで説かれた法華經のやうなものでなければならぬといふ

中途半端のいゝ加減な生活では居られなくなつてしまふ。だから悪い方は思ひ切つて惡くなる。この頃よく新聞に書いてある出來事を見てもさうです。吾吾の子供の時とまるで違ふ。人を殺すと言つてもただ殺すだけではない、殺して身を細かに切つて箱に詰めて流すといふやうな事をやらなければ氣が濟まないからでもあらうが、さういふ事をやる。そのやうに悪い事をやつても思ひ切つて悪い事をする。さうして恥かしいといふやうなことは思はなくなくなつて來る。例へば賄賂を取つても、吾々の子供の時には賄賂を取つたといふ嫌疑を受ければ恥かしいと思つたが、この頃は一度や二度賄賂を取つたつて何でも無い『取つても返せばそれで宜いぢやないか』といふやうなことを平氣で言ふやうになつて來た。これは人間が圖々しくなつて來たから、悪い事を思ひ切つてやるのでありませう。

併ながら又さういふ狀態を見て、これではならぬ

これでは人間として生きる甲斐がないと、深く思ひ詰める人も出来て来るのでありますが、さういふ人は心の中から信仰を求めめるのだから、これは深いものであります。これは自分の宗旨が法華だから法華を信仰するといふやうな簡単なことではない、自分の家が眞宗だから念佛を唱へるといふやうなことでない。自分の心の底から眞實のものを求めめる。「何が眞實の人生の有ゆる問題を解決する教かな」と求めて行くのでありますから、これは眞實の要求であります。

この二つが對立する譯です。一方の方に於ては煩惱がだん／＼増長して、やりたい事をやつて居る、又一方に於ては、これではいかんから何か眞實のものを求めたい、斯ういふやうに對立して居る譯であります。今の世の中は大抵それでありませう。悪い方は非常に悪いのだけれども、併ながら又元の平和だつた時には考へないほど深く考へて居る人も、極

めて少数ではあるけれども、確にある。これは對立して居るので、それでまん中の所の者はどつちにも附くのです。マア世間の大多數は、悪い事をする者が勢力を得て、「ナーニ構ふものか」と大きい聲を立て、通つて行けば、大概の者は皆「構ふものか」になつてしまふ。それから「どうしてもそれではいかぬ、本當の信仰をしなければならぬ」と言ふ者が勢力を得て来れば「それでは信じようかな」といふので、斯ういふのでまん中の所の者はどつちにもクツ附くのであります。

それだから法華經の中に言つて居る。法華經のやうなこんな佛の魂を籠めた教を「これはつまらんものだ」と言へば、まん中どころにフラ／＼して居る者はつまらないといふ方に誘はれてしまふ。それだから世の中の「佛種を斷つ」佛に成る種を無くするのだ。それは自分一人が法華經を誘るといふだけならば罪は輕いけれども「法華經はつまらぬ／＼」

と言つて、佛の魂を籠めて説いたものを軽くあしらふ人が大勢になると、どつちにしようかといふやうな者は皆それに誘はれてしまふから、世の中に佛に成る種が無くなる、その罪は非常に大きいといふことを言つて居るのであります。

それだから若し教といふものの勢力が無くなつて幾ら教を弘めようとしても、心を同じうする者が無いといふことになつて、正しい教を弘める人がスツカリ弱つてしまつた時には、兩方に分れて居るのだから、その悪い方の者ばかりが全勢力を得ることになる。これを藥王品の中に言つてある。どうしてもこの教を弘めろ、弘めないといふと、惡魔魔民といふ悪い者が勢力を得て、世の中がスツカリマツ暗闇になつてしまふ、まるで駄目になつてしまふといふことを言つてあります。それだからこの法華經を弘めるといふ功德が非常に大きい。たゞ正しい教が弘つて世の中が明るくなるといふやうな簡単なことで

はない、若し弘まらなければモウ永久に世の中は教はれない、まるで惡魔の時代になつてしまふ。中途半端なことでは居られない、それだからこれは大變な功德だ。斯ういふのであります。

そこでそれ程の功德を積む仕事であるのだから、その代り骨が折れるぞ、その代り軽々しくは出来ないうぞといふので、三度繰返して末の世に弘めるといふことを仰しやつた。その二度目と三度目のまん中どころでこの六難九易といふものが説かれて居る。併し骨が折れる、難かしい、容易なことではない、なか／＼普通の覺悟、普通の決心では到底これは出来ないことだと言はれて居ります。

それだから日蓮上人がいつでもその事を言つて居らつしやる。それは初めから解つて居ることだ、自分が法華經を修行して世の中に弘めたいといふ決心をした時から、その事は解つて居るので、どうせ易しい事だと思ひはしないといふことを言つて居られ

るのであります。だん／＼世の中が末になると、成るべく骨を折らないで、成るべくうまい事をやらうといふやうな料簡が起すけれども、そんな事は出来るものではないのであつて、善い物はどうせ骨が折れる。品物を拵へても上等な品物は、そんなに手間を取らないで作るといふことは出来るものではない。それは何でもさうです。木や草の種を播いても、一年で枯れる草花は、十日か十五日で芽が出る。樺や楠のやうに千年も榮えるものは、種を播いてから半年を経たなければ芽が出ない。早く出来るものはどうせ善いものではない、骨折らずに出来るもので善いものは決してない。だから法華經を世に弘めて、本當に人の心を樹直すナンといふことがそんなに易しく出来るものと思ふのは間違ひなので、確に難かしいものであります。

これは説くばかりではなく、自分の信仰を本當にしつかりと確立するといふことは、それは非常に難かしいものであります。これは人間の力では出来ない事でありますが、縦しそれが出来ても、法華經を弘めるといふ方がモット難かしいといふことを、力を籠めて寶塔品の中に言つてあるのであります。

日蓮が強義經文には符合せり。法華經の流通たる涅槃經に、末代濁世に謗法の者は十方の地のごとし、正法の者は爪上の土のごとしとかれて候は、いかんがし候べき。日本の諸人は爪上の土か、日蓮は十方の土か、よく／＼思惟あるべし。賢王の世には道理かつべし、愚主の世には非道先をすべし、聖人の世には法華經の實義顯るべし等と心うべし。

それだから世間が日蓮上人の仰しやることを信じない、なか／＼信じないと言つても日蓮に於ては驚きはしない『日蓮が強義經文に符合せり』世間の人

二四
かしいことであつて、なか／＼容易に出来ることではない。けれども教を弘めるといふ人が一種の營業になつてしまふといふと、自分の方に大勢の人が集まつて來ないといけないから、そこで『難かしい』といふことを言はないで『易しい／＼』と言ふ。『ナニ題目を唱へて居れば自然に教はれる』佛様の前へ行つてお辭儀をすれば皆罪が消える』と言ふ。そんなことを言はなければ人が集つて來ない。今の世でも實際さうであります。『易しい／＼』と言へば人が大勢集つて來る。『なか／＼難かしい、しつかりしろ』と言へば、そんな事は面倒くさいと言つてなか／＼人が集まらぬ。それだから本當に有ゆる人の有つて居るところの問題を皆解決するのだといふ教を、世の中に廣く弘めようとすることは、容易な事ではない。そこに大變に骨が折れるといふことを覺悟しなければならぬのであります。須彌山といふ大きな山を接つて他の世界へ抛り出すといふやうなことは

は何と言ふか知らぬが、自分が常に飽まで自分の主張を貫いて、どんな迫害に遭つても願みずやつて居るといふことは、それは法華經の本文には能く合つた態度だと思ふ。

それで法華經から尙ほ續いて流通分といふのは、その法華經の本文を更に敷衍して詳しく説く方の部分であります。その法華經を更に敷衍して詳しく説いたところの涅槃經といふも經の中には、末代に及んで『濁世』世の中が濁つて悪くなつた時に『謗法の者』佛の正しい教に背く者が非常に多い、十方世界の土のやうに夥しくある。それから正しい教を本當に信じて居る者は、爪で地面を搔くと、爪の間に土が少し挟まるのですが、その爪に挟つた土ぐらゐのものである。逆も比べることは出来ないといふことが言つてある。これは一體どう考へたら宜いか、今の日本の國を見ると、法華經が間違つて居ると言ふ者が夥しくあつて、ちやうど十方の土のや

うであり、法華經は佛様の御精神に一致して居るものだ。佛様の眞實の教だといふことを言ふ者は日蓮一人、ちやうど爪に挟つた土のやうなものである。それを日本國の諸人は爪の間の土であつて、日蓮が十方の土のやうだと思ふかどうか、考へて見たら宜いだらう。經文に基くといふと、今の世の中に於て法華經を弘める人一人といふものがこれが本當なんだ、一人が本當に命懸けて教を弘めることに依つてだん／＼とこの教が弘まるのであつて、初めから直ぐに總ての人が信仰するといふやうな、そんなものではないといふことが明かであると言はれて居るのであります。

これは開目鈔といふのは、前に申したやうに、四條金吾の使に持たせて歸して、日蓮上人の信者の決心を固めさせることを主にして居られるものですから、自然斯ういふことを丁寧には言はれるのであります。易しいと思つてはいけない「これまで骨折つた

のに何故效目が無いかナ」といふやうな、そんな意氣地の無い心持を有つてはいけない。眞實の事をやるのだから難かしいのだといふことを飽まで覺悟しなければならぬといふことを言つて居られるのであります。

それで「賢王の世には道理かつべし」世の中の政治が正しくて、善い政治が行はれ、善い教が行はれて居る時代には道理が勝つて、道理に合はない事を言へばそれは排斥されるけれども、愚な者が政治を執つて居る時代になれば、非道が道理を壓し、非道が先に弘つて、正しい教が壓へられるといふことはこれは據らない。併しだん／＼と弘めて行つて、眞實の教が弘つて、聖人といふやうな、物の道理の解つた人が世の中にだん／＼多くなつて来れば、その時こそは「法華經の實義」佛の眞實の心を打明けられた、佛の精神といふものが世に現れて来る。斯う考へるが宜しい。

此法門は述門と爾前と相對して、爾前の強きやうにおぼゆ。もし爾前つよるならば、舍利弗等の諸の二乗は永不成佛の者なるべし。いかんがなげかせ給らん。

ところがその法華經といふものは、僅に八年説かれたものであつて、さうして法華經の説かれるまでの間は、四十二年とか四十三年とかいふやうな、非常に永い歲月の間掛つて居るのだから、經卷の數から言つても法華經よりは前のいろ／＼な經が多いし、又この法華經以前のいろ／＼な教といふものは永い間世の中に流布して居る。だから法華經と爾前即ち法華經以前の經と比べて見ると、爾前が強く法華經以前の教の方がどうも人に能く解り、人の受けが良い、又人々がそれを尤だと思ふといふことは、これは己むを得ない。そこを斷ち切つて行くのだから、法華經を弘めるといふことは骨が折れるぞ

斯ういふのであります。「爾前の強きやうにおぼゆ」どうもこれは法華經以前の者の方が勢力が有るやうである。

併し考へて見ろ、法華經以前の教が勢力が有るけれども、若し法華經以前の教が本當に勢力を有つてしまつたらどうなるか。さうなつたら舍利弗といふやうなお弟子達は、これは小乗の教を聞いただけになつてしまふのであるから、これは永久に佛に成れない。法華經を聞いて初めて舍利弗といふものが、成程どうも菩薩の行といふものは尊いものだ、佛様の心持に一致した行ひをすれば宜いといふことの本當の決心をしたから、そこで釋迦様が、お前の今の決心を變へないで大にやるが宜い、さうして努めて止まなければ後に佛に成れぞといふことを仰しやつた。若し法華經といふ教が無いならば、小乗の教を聞いた者は、いつ迄經つても小乗の教で澤山だと思つてしまつて、本當に菩薩の行を積んで世の中の者

を教ふといふ心持を起さなければならぬ。さうだつたら
佛の世の中に出て教をお説きになつたといふ趣意が
立たなくなる。

そこを能く考へなければならぬ。そこが難かしい
所であつて、今の所は爾前の經、法華經以前の經の
方が勢力が有るけれども、勢力が有るからと言つて
その爾前の經ばかりを流行らして、法華經を放つて
置いたならば、折角佛様が一切の人間に皆菩薩の行
を勵まして、皆結局は佛の境界に到達させてやらう
といふその慈悲心が無駄になつてしまふ。それでは
佛の教を信ずるといふことの甲斐がないぢやないか
だからどんな難かしいものでも、如何に骨が折れて
も、この法華經の教といふものを信じて、さうして
自分もこの信仰を勵んで行つて、又他の者をもその
道に入れるといふ決心をしなければならぬ。斯うい
ふ事をハツキリ言はれるのであります。

これで先づ法華經と諸經との關係が一段落致しま

になるのでありますが、これはお釋迦様の五十年の
間の御說法といふものはいろ／＼あつて、浅い事も
言はれ、深い事も言はれ、極く手近い事もお説きに
なり、又奥深い事もお説きになるのであります。が、
これはその教を聞く人の機根に依るのであります。して
今年はどういふものをお説きになるといふことを、
その年でできる譯には行かない。同じ時にでも、深
い事の解る者には深くお説きになるだらうし、浅い
事しか解らない者には浅くお説きになる譯でせう。
お釋迦様が御入滅の年にでも、相手がつまらない者
だつたら浅い事をお説きになるでせうから、たゞ年
で以てスツカリきめる譯には行かない。併ながらこ
れを分類することは出来るのであります。

それで天台大師はこれを分類して「五時」と言は
れました。併し天台大師が五時といふことを言はれ
たからだと言つて、さうその五つの時を、初めの何
年間はこれを説いて、次の何年間はこれを説いたと

した。この前に、法華經に就いての殊に大事と思は
れるものが二つあるといふことを申しました。が、そ
の一方の事が一段落して、次にある「二には」
といふ所からは、本當に大事なものであると言つて
あるその二つ目の方の話に移るのであります。即ち
この法華經と他の經と比べて、又この八十歳で御入
滅になつたお釋迦様は、實は久遠の永い生命を有つ
て居る佛様が人の身を假に取つてこの世に出て、娑
婆世界を教ふ爲に教をお説きになつたのだといふこ
とを明かにして、さうして佛と吾々との關係をモウ
一層法華經を本にしてしつかりと考へるやうにせよ
といふことが第二の點でありまして、これから先に
説かれて居るのであります。さうしてこれが又、前
の第一の點だと言はれた事よりも、モウ一層大事な
問題になる譯であります。

そこで今度は「教主釋尊」すなはちお釋迦様とい
ふものを、一體お經の中にどう見るか、斯ういふ話
いふやうに、これに拘泥するのは間違つて居るので
そんなことはない。ズツと後になつても、相手が解
らぬ者で、解らない様子なら易しい事を説かなけれ
ばならぬ。初めの内でも相手が本當に解つたら深い
事を説かれたのでせうから、天台大師が五つに分け
たといふことは、大體に於てお釋迦様がお説きにな
つた教の内容を五つに分けるのであります。から、年
代を分けてしまつて、五十代にはこれを説いて、六
十代にはこれを説いたといふやうに取つては、それ
は佛教といふものの本當の精神とは違つて來るので
あります。甚だ人の悪口を言ふやうですけれども、
徳川時代の宗學者の中にはさういふことを固執して
居る人があつて、一體釋尊は幾年迄に般若を説いた
のだ、幾年から華嚴を説いたのだといふ風に、年代
で分けて居る者があります。けれども、決してそん
なことはない、それでは教を説くといふことは出來
ない。モウ今年は難かしい事をお説きになる時だか

ら「解らぬ者は放つて置け」といふやうなことで、仕様が譯でありませうから、そんな筈はない。天台の五時といふことは、時期に關はつてはいけなものでありまして、お釋迦様の教の内容を大體分けて見ると斯ういふ風に分けられるだらうといふのであります。そこはどうぞ間違ひのないやうに願ひたいのであります。

その天台の「五時」といふものは、他の場合にも申しましたけれども、今こゝにその事が出て参りませうから申して置きますが、天台大師は

華嚴 阿含
大方廣 華嚴經
法華 涅槃

といふ五つに分けて居ります。これはお釋迦様のお覺りになつてから御入滅までの間にお説きになつた

教を、類に依つて五つに分けたのであります。この中で法華、涅槃は續きのものでありまして、涅槃といふのは法華經を更に敷衍して詳しく説かれたものでありますから、法華涅槃と斯う言つて一つにするのであります。

そこで「華嚴」を一番先に説かれたと言つて居ります。華嚴といふのは、佛様の境界を説いたもので佛とはいふ力を具へ、どんな徳を具へ、どんな智慧を具へて居らつしやるかといふことを詳しく説いたものであります。華といふのは佛の具へて居らつしやるお徳に譬へ、嚴といふのは飾るといふことで、華を以て飾るといふのは、非常に美しい勝れた徳が具はつて居らつしやることとありますから、併ながつまり華嚴は佛を説いたものであります。所謂菩薩の行を積んで遂に佛にお成りになつたのでありますから、佛を説くといふには菩薩を説かなければ

ならぬ。それで華嚴經は佛を説いた經だといふことになつて居りますが、寧ろ菩薩の行の方を餘計に説いてある。これはその筈であります。結果といふものはその境界になれば自然に解るのであります。その佛に成るのにはどういふ修行をしなければならぬかといふことが、これがマア吾々には一番大事な事でありませう。だから華嚴經には菩薩の行をしなければならぬといふことが非常に細かく説いてあるのであります。さういふ性質の經典であります。この華嚴經を一番先に説かれて、その次に「阿含」を説かれたと天台は言つて居ります。これは併し教を説く事としてはさういふ順序は立たない。初めに恐ろしく難かしい事を説いて、その次に易しい事を説いたといふことではこれはどうもあかしい。それだから、これに就て何時誰が言ひ出したのか判りませんが、つまらない俗説が出て居ります。お釋迦様は一番初めに華嚴といふ難かしい事を説いたところが

誰も解らなかつた。これではいけないといふので、又出直して、今度は阿含といふ易しい教を説き直したといふやうな、こんな説が、相當に有力なものになつて傳つて居るのであります。これは誰か拵へた話で、そんな筈はない。佛様ともあるものが、聞き手の機根が解らないで、まるで解らない事を説いて、これは縮尻つたと言つて出直すといふのでは佛様でも何でもない。吾々のやうな凡夫だつて、まさかそんな縮尻つて出直すといふやうなことはしない。幾らか程度を見て説くのでありますから、お釋迦様が縮尻つて説き直されたといふやうなことは信ぜられない。それではどう解釋するか。天台の方の説を承け繼ぐ者は、華嚴を初め天に向つて説いたと言つて居ります。人間に向つて説いたのは阿含が初めて、華嚴は天に向つて説かれたのだ、斯う解釋するのであります。これは善い解釋であります。天に向つて説くといふことは、自分の心の中に案じて

居られるといふことで、さういふ風に解釋すれば、華嚴が一番初めだといふことは確に筋道が立つのであります。お釋迦様が六年の修行をして、佛陀伽耶で、本當に人生の事を極められ、これから一つ世の中に出て教を説かうとお考へになつた時に、先以て佛や菩薩の事を深く心に案じて居らつしやるに相違ない。どんな修行をしたら皆佛に成るか、又佛として世の中を教ふにはどういふはたらきをすべきであるか、どの方面の何處に最も力を入れなければならぬかといふことは、これは佛様として本當にお考へになつたのでありませう。さういふ意味から言ふと一番初めに華嚴をお説きになつたといふのは、人に向つて説かれたのではない、天に向つて説かれた。天に向つて説かれたといふことは、自分の心の中に深く案じて居られた、その事をしつかり思ひ定められた。斯ういふことでありませうから、さういふ意味に於て華嚴といふものが一番先に出て居るのは大

に道理があるのであります。

それで前にも申上げたことでありますが、若し佛とは何ぞやといふ問題を詳しく知りたいと思ふ方、或は又菩薩行といふものに就て非常に細かい事を知りたいと思ふ方は、華嚴をお讀みになるが一番宜いのであります。これは随分長いお経で、なか／＼面倒なものでありますが、併し佛と菩薩に就ての詳しい説明は、どの經よりも華嚴で實に能くこれを盡して居ります。これは法華經といふものとは又別の性質のものでありまして、それは後で申上げますが、さういふ譯で華嚴を説かれたといふのであります。夫は「阿含」阿含といふのは總てが含まれるといふ意味です。總てが含まれるといふのはどういふことかといふと、普通の人間の心の中にあるものが皆含まれて居るといふ意味です。佛や菩薩のことではなく、吾々普通の人間の心の中に起つて来る有ゆるはたらきを見抜いて説かれたもの、それが阿含であ

ります。吾々は凡夫だ、けれども、この凡夫はたゞ凡夫ではない、幾度も言ふやうに、凡夫だつて佛性がある、だから吾々は有ゆるはたらきを心の中に有つて居る、随分不材簡も起きて悪い事をいろ／＼考へるが、又後で考へて自分ながら感心だと思ふやうなことも稀には考へる。マアそれは一切衆生を救ふナンといふ廣大な事を始終考へて居る譯には行かないけれども、少くとも自分の一族、自分の知つて居る人に好意を有つくらゐのことは吾々でも出来るのであります。自分の子供を可愛がる心持が、一切の人に及び、自分の家族と親しむ心持が、一切の人に及べば、佛が總ての人を救ふといふはたらきに近くなるのでありますから、さういふやうに考へれば凡夫だつてたゞ自分の事ばかり考へて居る譯ではない。そこで吾々の心の有ゆるはたらき、時に依れば自分の勝手ばかり考へるやうな心持もあれば、時に依れば、自分を捨てるやうな考へもあれば、時に依

れば本當に後から考へて感心するやうな心持もあり時に依れば自分で後から考へたらゾツとするやうな間違つた事もヒョツと出て来る。現に私なども始終さう思つて居ります、一々外に見えないから宜いのですが、こんな所で法華經の話などをして居る時は悪い料簡は無いやうに見えるけれども、なか／＼さうではないのであつて、時々自分勝手な心持が起つて困るのであります。

さういふやうなものでありますから、吾々の心にはいろ／＼なはたらきがあるのであります。私共は熟々さう思ふ、世の中が苦しいといふのは、つまり言へばそれナンです。どつちにか片附いてしまへば世の中はそんなに苦しくない。何でもかまはない自分勝手にやつて、それでいけなければ首を縊つて死ぬるまでだ」と思ひ詰めて見れば、却て非常に樂であります。英吉利のオスカ・ワイルドといふ人が言つた事でありませんが、何でもかまはないから、

家中の物をスツカリ賣拂つて金に換へて、左のポケットに入れて、右のポケットには繩を入れて置け。さうして他の人の事はかまはないから、そこらを歩き廻つて、左のポケットに入れてある金で以て美味い物を喰つたり、酒を飲んだり、さん／＼勝手放題の事をして、いよ／＼行詰つたら右のポケットにある繩を出して、首を絞つて死ねば宜いぢやないかといふ、これは随分徹底した話であります。さうやれば却て樂ナンであります。ところが吾々にはそれが出来ない。やはり人の事も氣になる、人の事が氣になるならば、自分の事はスツカリ忘れてしまつて始終人の事ばかり考へて居れば宜いけれども、それも出来ない。或る時には自分勝手の手前になり、或る時は自分ながら感心するやうな善い心持にもなりあつちへ引かれたり、こつちへ引かれたりして居るから人生が苦しい。吾々が鏡に向つて自分の顔を見ると、皺がだん／＼殖えて来る、これはどうした皺

だらうと我ながら思ふことがあります。それは皆自分の事を考へたり、人の事を考へたり、あつちへ引かれたり、こつちへ引かれたりして居る間に、顔がクシャ／＼になつたのですが、本人はそれを知らな

にもない。何故なら人間といふものは皆他の事が氣になる、自分一人覺つて、自分一人幸福になつたら宜いといふことは、佛様は何處にも言つてない。阿含だつてやはり人を救ふことを説いて居る。たゞお互に凡夫として心／＼な迷ひがありますからその迷ひをどうしたら制して行けるかといふことを主に説きましたものが阿含であります。

それから「方等」といふのは、これは兩方に亘るといふこと、兩方といふのは大乘と小乗の兩方に亘る。方といふのは双方といふこと、自分の方の煩惱を除くことを、他の人を教へ導くといふことを、双方に亘つてどつちの人にも適するやうに教を説く、これが方等であります。一體大乘の經典といふものを残らず方等とも申しますけれども、こゝではさうではないのであつて、低い方と高い方との兩方に亘る教、斯ういふ意味で方等と言つてあります。

次に「般若」といふのは空智といふことであります。

す。空といふのは一切の差別を離れる意味で、一切の差別を離れ、世間の變化を離れ、さうして眞實のものを求めるところの智慧を磨く、その道を示されるものが般若であります。だから般若部といふものを読んで見ると、皆それを説いて居る。世間の差別といふものは眼の前だけのもので、世間の變化といふものは始終移つて行くのです。けれども眞實の道といふものは千萬年を通じて變らない、眞實の事は飽まで眞實です。それから世間の差別や世間の變化に執はれないで、眞實のものを求めて、眞實の佛様の智慧に近いやうな智慧を磨くことが本當だ。それにはどういふ風な心掛けを以てやつたら宜いかといふことを説かれたのが般若であります。

それから「法華」であります。これは前に法華經のお話をした時に一通り申したのでありますが、今までズツと華嚴で佛の事を説かれ、阿含で凡夫の事を説かれたのを、こゝで纏めて、その最後の佛の境

界に到達すべきその一番勝れた道を示すといふのが法華でありませす。阿含で、凡夫でも斯ういふ點を大事に考へて行くと佛の境界に行けるのだ、それはナニモ空な事ではないので、これは釋尊がこの世に出て五十年の間に實行したことだ、釋迦牟尼といふ活きた佛様の行ひを能く見て行けば、これは自分が凡夫が佛に成るといふ道を身で以て現はしたので、この娑婆世界に自分が出て来て、此土で修行して、此土で覺つて佛に成つて見せるといふことは、お前達凡夫が皆佛に成れるぞといふ確信を與へる爲であつたといふので、お釋迦様御自身が身を以て凡夫が佛に成る道を説かれる。そこに法華經といふものの特色がある。だから法華經は華嚴とか般若などに比べれば極く短い經であつて、法華經には、こまかい説明は無い。随つて凡夫の迷ひはどんなものだといふ説明も法華經には無い。法華經はたゞ我、釋迦牟尼佛がこの娑婆世界に生れて来て、皆の前で修行して

皆の前で覺つて、佛に成つたのだと思つて居るであらうが、自分は始めなき始めよりの佛なのである。而かも衆生教化の爲めに種々の方法を採つた、これに依つてお前達も最後には皆佛に成る大決心をしろといふ、この大事な問題をハッキリ言はれた。それが法華であります。

めるといふ譯には行かないから、それで日蓮上人が法華經をどうしても信じろ、他の經に心を移してはいかぬ、斯う言はれるのであります。併ながらこの間申したやうに、目標が一度定まつて、方向が定まつてから、その定まつた心持からもう一遍讀み直して見れば、華嚴も非常に良い教訓を澤山含んで居れば、阿含も非常に良い教訓を澤山含んで居るので、心の中心が動かなければ、どれでも皆役に立つて行くのであります。その所は間違ひないやうにしなければいけないので、法華より外のものは要らないといふことは、信仰の中心を定める爲の言葉であります。それからいろ／＼な問題を解決することが望みであるならば、それは凡夫の問題を解決するには阿含を讀むが宜い、菩薩のことに就て疑が起れば華嚴を讀むが宜いといふことになるのであります。

それだからこの前にも申したやうに、吾々の信仰の對象をきめるのには法華經が良い、これを目當として、吾々は今凡夫だけれども、お釋迦様のやうに菩薩の行を勵んで行つて、佛の境界にまで行かう、この目標をきめるのであります。それが華嚴では何も無い、華嚴は佛や菩薩の事のみ説いてあるだけで吾々の取り付く所が無い。阿含にも無論何も無い。阿含を見ると、凡夫の事ばかり言つてあるので「ナニ自分一人ではない、他にも同類がある」といふやうな氣になつてしまふ。それでは大決心が附かないどうしても法華經でなければ本當に信仰の目標をき

能く辨へて讀むといふことは非常に必要でありますさうでないといふことは法華を讀めば何でも解るだらう」と言つて讀んで見ても、チツトモ譯が解らぬといふやうなことになるのでありますから、その所はどうぞ間違ひのないやうにありたいものであります。それでこの所も今申した事をだん／＼詳しく申して居るのであります。

二には、教主釋尊は任劫第九の減、人壽百歳の時、師子頻王には孫、淨飯王には嫡子、童子悉達太子、一切義成就菩薩これなり。御年十九の御出家三十成道の世尊、始寂滅道場にして實報華王の儀式を示現して、十玄六相・法界圓融・頓極微妙の大法を説き給ひ、十方の諸佛も顯現し一切の菩薩も雲集せり。

斯ういふやうな譯でありますので、經典の性質を

「任劫」といふことは、これは印度の昔からの言傳へ

に「四劫」といふことであります。それは

成劫 住劫 壞劫 空劫

といふのでありますが、これは單に佛教に始つたことではありません。印度の婆羅門時代から斯ういふ言傳へがあります。「成劫」といふのは、總ての天地萬物がだん／＼形を成して來る時代、それから「住劫」といふのは、その出來上つた物が暫く壞れないで、元のやうに平和で居る時代、それから「壞劫」といふのは、總ての物がだん／＼壞れて行つて無くなる時代「空劫」といふのはモウ何も無い時代。それから又成劫に戻つて物がだん／＼出來て來る。斯ういふやうに、この四つの時代が、何萬年でも何億年でも、何十億年でも順々に繰返されるといふのであります。それで今の吾々の生きて居る時代は住劫

ん所まで來ないから安心であります。けれども、そんな事がある。

それでお釋迦様は、住劫第九の滅、人壽百歳と定まつた時に、師子頰王には孫であつて、淨飯王には總領のお子様であるところの悉達太子といふ方である。この悉達太子が永い間修行して、一切の義がスツカリ成就して、一切の智慧が具はり、一切の慈悲の力が滿ち渡つた行ひをして、さうして結局佛にお成りになつた。さうして御年十九の時に出家して、三十の時にお覺りになられる、その一番初めの寂滅道場、即ち佛陀伽耶でお覺りになつた。そこを寂滅道場と言ふのであります。「寂滅」といふことは一切を離れるといふことで、無くなるといふことではない。一切の迷ひ、一切の苦しみ、一切の差別をスツカリ離れてしまつて、さうして愈々人生の眞實の意義が解りになるのでありますから、そこを寂滅道場と言ふのであります。

であります。だん／＼物が出來上るのではなく、一通り出來上つて落着いて居る時でありますから、住劫の時であります。その住劫を細かに分けて二十に分けますが、その二十に分けた中の第九番目に當る時が、お釋迦様が世の中にお出になつた時代だと普通に通に言はれて居る。これは別に教義上必要なことではありませんけれども、印度では昔からさういふやうな事を能く考へて居るのであります。

そこで住劫を二十に分けた中の第九番目の時代は人間の壽命がだん／＼減つて行く。それだから「第九の滅」と言ふ。これは人間の壽命が非常に長い壽命を有つて居つた時代もあるけれども、それがだんだん減つて行く。第九のお釋迦様の出られた頃は、長く生きて百歳ぐらゐ生きる時だと言はれて居ります。それから後だん／＼人間の壽命が短くなつて、十歳になるとモウ死んでしまふ時代が來るといふやうなことを言つて居ります。マア吾々の時代にはそ

この事は今まで幾度も申したことでありますが、お釋迦様が本當にお覺りになるまでには、いろ／＼なものも皆離れてしまはれた。一番初めには王様のお子様で王子であつた。王子であつて、人生の問題に就いていろ／＼な悩みを感じて、人間何しに生きて居るか解らぬからいろ／＼煩悶苦悶が起きたのでありませう。その時に自分一人で考へてもなかく解らない。そこで大勢の家來達の勸めに従つて、當時の名高い婆羅門の學者を大勢御殿にお集めになつてさうしてその教を聞いたけれども、誰の説も太子の心を満足させるものはなかつた。そこで太子の地位を捨てようと考へられた。これが離れる初めでありませう。ナニモ宮中の生活が嫌やだから逃出すといふやうなそんなことではない、自分は人生の眞實の意義が知りたなのだ、それには人を呼んで御殿で習つたのでは駄目だ、こんな王宮のやうな偉い所で威張つて、大勢の人を呼び付けて聞いても眞實の事を言

分の心では本當に乞食の生活をしたかつたのでありませうけれども、どうも恩愛の情といふものがあるものでありますから、又それを受けられた。世の中にさういふ事は始終ある。吾々でもさういふ事はよくあるのです。人の好意といふものは、随分迷惑な事でも好意ならばどうも仕方がない。殊に又年老つた親が案じて家來を附けて呉れるといふことは、人情としては拒む譯に行かない。そこで五人の家來を伴れて方々修行して廻つたのであります。

ところが何處の學者も自分を満足させる譯に行かないから、そこで佛陀伽耶といふ所に来て、愈々以て今度は一人で修行して佛に成るのだ。斯うなつたそこで釋尊が五人の家來に向つて『今日からはモウ親の仕送りを断るのだ。人間一人で生きられなければ仕様がなない。生きるといふこと一つさへ自分が能く出来ないで、人生の問題を解決しようと思ふのは駄目だから、今日から自分一人で生きる。今日から

骨が高くなつて、眼が落ち回んで、實に見る影も無い有様になつて居る。そこで、これではいかぬ、今まではたゞ眞實の事を求めるばかり考へて、身の事をウツカリして居つたけれども、この身は自分の身ではない、初め出家する時に、人生の眞實の意義が解つたら、親を教へよう、妻子を教へよう、家來を教へようと決心をして出家をしたのだ。その約束を果さないでこの儘此處で死んで終るならば、今まで自分が苦しんで出家したといふことは意味が無くなくなつてしまふから、この身は大事な身だ。この身を粗末にして、どうもこんなに瘦せてヒヨロ／＼するやうではいけない。これからは身の事を餘程考へなければならぬ。この身を大事にするといふことは、親の爲でもあり、妻子の爲でもあり、大勢の家來の爲でもあるから、これはウツカリ出来ない。斯ういふ事を本當に考へられた。そこが又非常に大事な所でありませう。たと何でも道を求めさへすれば宜いとい

は人々の門に立つて乞食をして、それで生活して、親からの仕送りを断はる。お前達どうする、お前達今までのやうな楽な生活をしたのなら縁が無いのだから、歸つて貰ふより仕方がない、乞食の生活を自分と一緒にするならば、此處に一緒に居ても宜い』斯う言ふと、五人の家來も『洵にそれは結構です、私共もそんな苦しみは何とも思ひませぬ』と言つたものでありますから、そこで佛陀伽耶の六年の生活が始つたのであります。その六年の中の初めの五年間は五人の家來が釋迦様と一緒に居つて、毎日あつちこつち人の門に立つて物を貰つて、それで命を繋いで考へを練つて居つたのです。

ところが茲に又一つの煩ひは、五人が附いて居るこれが又非常な煩ひであります、これはどうも断つてしまふ譯に行かない。ところが釋迦様が或る日佛陀伽耶の傍の河の畔を歩いて居らつしやる時に河の水に自分の顔が映つた。それを見たところが煩

ふやうな風に、あまり熱中してしまはないで、又思ひ直されて、さうして、これは大事な身だナと思つて居る所へ、若い娘が、村外れの神様の廟に供へるところの牛の乳の温めたのを瓶に入れて持つて來るそれにちやうど出會はれた。これから自分の身を大事にしなければならぬと思つたところへ、ちやうど美味い物を持つて來たから、その娘を呼び止めて、さうして『その牛乳はこの村の廟に上げるのだから、自分に呉れないか、自分の身は今非常に弱つて居るから』と言つた。ところが後には佛様に成るやうな勝れた方でありませうから、その言葉が非常にその若い娘の心に深くしみたと見えて、その娘は其處に坐つて、禮拜して『あなたのやうな偉い方がこれを飲んで身を丈夫にして下さるならば、こんな結構な事はありませんから差上げませう』と言つてその牛乳を差上げたので、それをお釋迦様は飲んで、大變身が強くなつたやうな感じをしたと言ふのであり

ます。

これを今の五人の家來が後ろの方から覗いて居て
愛想を盡かしてしまつた。どうもこれは危い。とい
ふのは、當時の印度の習慣として、婆羅門のやり方
では、難行苦行に耐へられない者は駄目だと言ふの
です。それだから難行苦行に耐へられないで、若い
娘を捉まへて直接談判をして、牛乳を取つて飲んだ
ナンといふことは怪しからぬ話だ、これはまるで墮
落だといふことで、お釋迦様の深い信心持が解らな
いで、これは墮落したのだ、こんな墮落した人間に
クツ附いて居ても仕様がなまいといふので、五人の者
が申合せてソツと其處を立去つて、さうして鹿野苑
といふ所がベナレスの傍にあります、五人は其處
へ行つて修行を續けることになりました。

こゝで始めてお釋迦様はソツカリ煩累を斷ら切る
ことが出来た。モウ親からの仕送しも斷つて來たし
五人の人も向ふから行つてしまつたから、本當に一

魔といふものは二種あるのです。いろ／＼惡魔の姿
が現れて居りますけれども、これを分けますと二種
になる。その一種の方の惡魔は、威かす方の惡魔で
刀を揮つたり、弓を持つたり、槍を持つたりして威
かす方の惡魔であります。それからモウ一方の惡魔
は綺麗な女になつて、さうして横目などを使つて、
花束などを持つて來て誘惑する。威かす惡魔と誘惑
する惡魔、これが現はれて來た。これを追拂つて始
めて所謂「成道」といつて、覺りといふものを得ら
れる。斯う言はれて居ります。

これは佛教の事ばかりではない、世の中の事でも
同じであります、モウ少しで出來上るといふ時に
二種の惡魔が必ず起つて來るものであります。一つ
は困難を感ずることです。弓を持つた惡魔や槍を持
つた惡魔が來たといふことは、それは迫害を思ふ心
持が起ることです。この自分の覺つた事はこれは正
しい事ナンだ、眞實の事だが、これを世の中に弘め

人になつた。なか／＼一人になるまでの間が大變で
す、いろ／＼引張り戻されたり、斷ち切つたりして
結局一人になつて大變安心された。愈々以て一人に
なつた、初めから望んだ通り本當の出家になつた。
一切の煩累を皆斷たれて、それから一人で乞食の生
活を續けながら、人生の事を能く考へられたのであ
ります。

そこでだん／＼と考が進んで參りまして、愈々以
て智慧が進んで、今まで考へた事が愈々纏まるとい
ふ、その近くなつた時に「降魔」といふことがある
のであります。これは印度を歩いて見ますと、石に
彫つた降魔の繪が方々に建つて居りますが、お釋迦
様が佛陀伽耶の菩提樹の下の大磐石の上に草を敷い
て坐つて、さうして人生の眞實の意義が解らない内
はこの座を立つまいといふ大決心をして居られた。
その時に惡魔が澤山現れて來て、お釋迦様を誘惑を
した、その繪には随分面白い繪があります。その惡

たら、世の中の人間は智慧の無い者だから、なかなか
か受付けまい、自分にいろ／＼な迫害を與へるだら
う、邪魔をするだらう、斯ういふ考がやはり頭に
浮ぶ。物が出来上る前にその迫害の事が頭に浮んだ
といふことが、鉾を執つたり槍を持つたりした惡魔
が現はれたといふことであります。これを斥けなけ
ればならぬ。困難を覺悟しなければ教は弘まらな
い自分に迫害が來るだらう、困難だらうといふことが
ヒョツとでも頭に浮ぶといふことは、これは所謂魔
が來たのと同じ事であり、これを釋尊は斥けら
れたといふのであります。それからモウ一つの、綺麗
な女になつて花束を持つて來て誘惑したといふこ
とは、それは名聞の惡魔で、斯ういふ事を説いたら
人が吃驚するだらう、人が感心するだらう。あゝ偉
い者だと言ふだらう。斯ういふ心持がヒョツと起る
自分が少し解つて來るとこれが起つていけない。人
に讚められたいナンといふ心持が假にもあつたら、

眞實の事が説けるものではない。吾々がチョットした事をやつても、この二つの悪魔が来ます。チョットした會を一つ起しても、難かしいと思ふと共に、調子良くやつたら人が感心するだらうと思ふ、この両方が漂つて居る。私共がチョットした小さい事をやつても、よくさういふ覺えがあります、愈々佛様が本當にお覺りになる時に、さういふ迫害があるだらうといふ心持がヒョット起つたり、又人が感心するだらうといふやうな念がチョット浮ばれた、それをスツカリ斥けた。さうして一切の眞實の事以外に何も無い、その一三昧の心持、眞實の事を自分が覺つて、眞實の事を説いて行くのだ、それを皆が聞くか聞かないかといふことを案じなくても、聞くにきまつて居る。何故なら自分も元は迷つて居た、そこを考へる。自分も元は迷つて居たのに、自分が修行して本當に覺れるやうになつたのだから、今迷つて居る者でも、その道を與へてやれば、キツト覺れるに違ひない。ナニモ心配は要らない、たゞ早く出るか、遅く出来るかといふだけである、心配は要らないといふ所にスツカリ心が落着いて、さうして結局成道、覺りを開かれた。斯ういふのであります。

これは随分大ザツバな話であります、實際この寂滅道場で、一切の事を捨てられたといふことは始めから有ゆる關係をだん／＼離れ／＼て来て、さうして眞實の事ばかり考へる。眞實の事以外に何も考へないやうになつた、そこで眞實の覺りが開けたのであります。斯ういふ事はよくあります。吾々が思ひ合せて見ても、吾々のやうなつまらない生活をして居る者でも、兎角後へ引張られたり、前へ引張られたりするのでありますから、お釋迦様のやうな地位も身分も高い方は、殊更にあつちへ引張られたり、こつちへ引張られる事が多くて、煩悶苦悶が多かつたらうと思はれる。さういふものをスツカリ打

拂ひましたのが、所謂佛陀伽耶の寂滅道場であり、その寂滅道場に於て覺られたといふのであります。

の四つであります。この四土といふのは心の中の世界です、吾々が教を求め、或は修行を始める時の状態から、スツカリ佛のやうな覺りを得て佛になつて行くまでの間、これはマア随分段があるのであります、それを大きく分けると四つあるといふのです。

さうして「實報華王の儀式を再現し」とあります、が「實報華王」といふのは菩薩の修行を了つて、佛の智慧が具つた時のことを言ふのであります。この所は皆華嚴經の説に基いて書いてあるのであります、華嚴經で「四土」といふことを申します、四土といふのは四つの土地と書いてありますが、四つの境界であります。實はこれは心の中の問題です。決して外界の問題ではない。吾々の心の中に四つの國土があるといふのであります。さうしてその國土がだん／＼移つて行く、それを四つの土、即ち四土と申します。それは、

その一番初めは「凡聖同居土」これは凡夫の心持と、覺つた時の心持とがゴツチャに雜つて居る状態、今の吾々は凡聖同居土であります。佛様のやうな心持も頭のこつちの方へ入つて居る、凡夫の心持もこつちの方に入つて居る、一緒にゴチャ／＼になつて居る。だから時々佛に近いやうな事も考へる、又時々凡夫の淺ましい事も考へる、入れ雜つて居る。それが凡聖同居であります。吾々は——吾々と言ふと皆さんを仲間に入れて失禮ですが、大概の人は凡聖同居土でお終ひになつてしまふ。』どうせこれ

- 一、凡聖同居土
- 二、方便有餘土
- 三、實報無障礙土

四、寂光淨土

から苦勞してやつても先が短いのだから、マアこの邊で宜からう」といふことになつてしまへば、凡聖同居でお終ひです。娑婆世界の世の中を見てさうです。世の中は凡聖同居で、自分の心の中に凡夫の氣持と覺つた心持とゴチャ／＼に雜つて居るそれが凡聖同居といふことであります。

その次は『方便有餘土』これは前の方便の教を聞いて、さうして迷ひを除くことだけは出来る。併し迷ひを除くだけではまだそれではつまらない、まだ餘地がある。餘地があるといふのはどういふのかといふと、マア腹立たないやうになつても、腹立ち易い氣分といふものはなか／＼抜けるものではない。慾張らなくなつても、欲しくなりさうな心持はなかなか抜けるものではない、それが有餘であります。それまではなか／＼容易ではない。一通り善い行ひは出来る、一通り誰が見ても間違ひがないやうな行ひは出来ても、心の奥を探して見ると、まだ／＼迷

大乘の教を受けて、モウ佛に近くなつた者、これが實報無障礙土であります。これは菩薩として一番極度でせう。

それから一番終ひは『寂光淨土』であります。

これは佛様の境界、寂といふのは變化が無い、千萬年経つてもチットモ變らない。さうして光に満ちた清淨な境界、これは佛の境界であります。凡聖同居土は修行を始めた者の境界、寂光淨土は佛の境界、方便有餘土、實報無障礙土はそのまん中の所です。吾々はまん中どころではない、一番初めの凡聖同居土の邊に居て、先の方に行かうとして居るところです。自分で考へて見れば判りますが、逆もその先の方まで行つて居ない。本當の菩薩といふものは實報無障礙土から寂光淨土に移つて行けるであります。せうから、結局佛に成れる譯であります。

さういふやうな四つの世界といふものがあるといふことを言はれて居りますが、それは華嚴經の中の

ひが残つて居る。それが方便有餘土であります。別の言葉で言ふと相似といふことを言ひますが、それがこれに當るのであります。形は似て居る。形は泥棒もしなければ、人殺しもしなければ、いつても優しい顔をして人に接して、いつても親切にして、形は佛や菩薩に似て居るけれども、腹の内を割つて見たら、まだ怒りさうな氣分だの、慾張りさうな氣分だのがある。さういふものをスツカリ除く譯に行かない。それが方便有餘土であります。斯ういふのがマア大分續いでせう、吾々はなか／＼そこまでは行けはしません、そこまで行ければ結構であります。それから今度は『實報無障礙土』本當に大乘の教が解つて、その自分の修行の本當の報いが茲に現れて、智慧も具はれば慈悲も具はり、さうして無障礙これを碍げるものがモウ無い。自分の智慧が悔ひやうな處はない、モウ自分の慈悲心が途中で小さくなつたり、碍げを受けるといふことではない。つまり

説でありますして、その一番初めに釋迦様が出家されました、その實報華王の儀式を現された。儀式を現すといふことは、誰が見ても、菩薩の行を積んで愈々佛に成られた人だと認められるやうな、さういふ境界まで進まれた、斯ういふのであります。つまり成道と言つて、覺りを開かれた。そこで覺りを開いてから眼を移して世の中を見ると、世の中のいろ／＼な相が一々今まで見たのと違ふのであります。すから、そこで『十玄六相』『法界圓融』といふやうなことが見られて来る、斯う申すのであります。

この『十玄』といふことに就ては、實はあまり細かい面倒なことになるので、略かうかと思つたのであります。華嚴の事などを話する機會があります。せんから、少し法華を離れたことのやうであります。一通り申上げて置きたいと思ひます。これはつまり覺つた心持を以て世の中の物を觀るその觀方、それが十玄といふのであります。だから華嚴の中に

「十玄縁起」とあります。世の中の事といふものは皆縁に依つて生ずるので、繋つて居りますから、それで縁起と言ふのです。世の中に孤立して居るものは無い。出来事でもさうであります、一つの出来事が不意に起るといふことは無くて、必ずそこに起るべき原因がある、草一本でも木一本でも、それ一つで存在するものではなくて、周囲と一緒に繋つて居りますから、それで世の中の有ゆる物の共に存在する有様を深く観て行く、その深入りして行くといふのが所謂「玄」といふことで、それを十に分けますから十玄と言ふのであります。「玄」といふことは深入りして見ることで、深く観れば逆も眞實の事は解らない、深入りしなければならぬ。法華經の中に、

深く禪定に入つて十方の佛を見る。
とあります。深入りするといふことが玄といふことであります。深く禪定に入らなければ仕様がな、たゞ靜に考へて居るくらゐのことでは、本當に佛様

はこんなものだといふことは解らないので、深く考へて一切を思ひ捨て、本當に心を静めて考へた時に初めて十方の佛を見る。佛の心持と自分の心持と通ひ合つたやうな心持になるといふことで、深いといふことに殊に力を籠めて考へなければならぬのであります。自分が深く禪定に入つて、深く自分の心を静めて佛と通ひ合つた心持になつて、この眼を移して世の中の有様を見ますと、そこに草一本生えて居つても、そこに木が一本生えて居つても、それは皆意義が深くなつて、これは大變尊いものだ、皆有ゆるものが佛のやうな尊い力を現はし、有ゆるものが至極の眞理を現はすものだといふことが解るやうになつて行く、これを十の箇條に分けましたものが「十玄縁起」といふことであります。さういふやうに深く見るといふことであつて、初めてその中から一切の人を教ふといふは、たつきが現れて來るのであります。たゞ靜に考へるといふことなしに活動を求め

まして、活動は出來ないのであります。靜に深く考へた中から、活きた力が生れて來る。それは大變大事な事であらうと思ひます。大變世の中の人の惡口を言ふやうでありますけれども、とかくに教を弘めるといふ人が、人に弘める方ばかり考へて、自分が深く考へることをしないから種が無くなつてしまふ。私などでも實際自分がさうでありませうけれども、深く考へないで人を教へるの、世を導くのといふことは直ぐ行詰りを來すことは判つて居る。これは餘程しつかり考へなければならぬことでありませう。斯ういふことで十玄六相といふやうなことを説かれるので、次回に一通り申上げることによしと思ひます。

(第十講了)

x
x
x

華嚴宗は、天台已前には南北の諸師、華嚴經は法華經に勝れたりとは申しけれども、華嚴宗の名は候はず、唐の代に高宗の後則天皇后と申す人の御時、法藏法師・澄觀などと申す人、華嚴宗の名を立てたり。此宗は教相に五教を立て、觀門には十玄六相などと申す法門なり、夥しき様に見えたりしかども、澄觀は天台をば破するやうにて、なほ天台の一念三千の法門を借りとりて、我經の心如工畫師の文の心とす、これは華嚴宗は天台に落ちたりといふべきか、澄觀は持戒の人、大小の戒を一塵をもやぶらざれども、一念三千の法門をば盗みとれり。——日蓮聖人聖密房抄——

本部 國 報

孟蘭盆精進祭 昔からお盆と正月といふこの意義深い一行事に、本部講堂に於て七月十一日午後二時から、小西日喜師の導師のもとに和賀義見、齋藤昭行、本郷日堂等の諸師大家と共に至誠を盡めた法味を、本團關係者ばかりでなく、今回日支事變の災靈にも捧げた。約二百の戒名をば、一同の唱題焼香中に讀上げ懇篤なる回向を修め、お互の實在意識をかかると共に、深めさせて戴く、ことは有難い事である。靈魂不滅を教へ、十界事當任の信念を増進する上からも、この精進祭は一層全国的に盛んになつてほしい。但しそこに大切なことは、孟蘭盆供は法華經の大善に依つて點睛されれば不徹底を免れない。

三時より講演に移り、議部理事より開會の辭と報恩奉盆經の捧讀に續いて『知恩報恩』と題して小林一郎先生の現實に即して奉典の慈教を垂れられ、中村清二先生は『忠孝一如』の法話を日蓮上人の

最後の例會を聞く。前日に引續き、議部先生より法華經摘要に於て有難き御法話を承る。丁度貴過ぎの最も暑い時間であつた、併し暑ければ暑いで、又寒ければ寒いで何時も信仰の集ひが、和氣霽々の裡に法悦に浸る喜と感謝とを以て行はれることは、何と言つても有難いことである。

同夜七時 中村家に於て支部會を催す。先生より孟蘭盆の由來に就て詳しく御講話を拜聴す。引續きいつもの如く愉快なる一般座談會に入り十一時散會。

餘 録

以上の外 本部役員會の記や、横濱、二本松の教信、其他團員誌友の御感想等を載いてゐるが、都合に依つて割愛することになりました。恐からず御諒承お願申上ます。

★

★

★

★

御遺文を根據に讀説され、最後に小西師の『孟蘭盆會』に對して正しい信仰の熱辯を振られ、五時退閉會した。

當日は曇天で割合に涼きよく、長谷川少將御夫妻を始め、法悦協會、同心會其他多數團員誌友の参列を得て盛大な法進を張ることが出来、各位へ親木師著『お盆の話』一部と心ばかりのお菓子の御供養をさせて戴いた。年末筆管様からお心の籠つた御喜納を拜受登錄して、護持正法の責に充つることを深く感謝致します。

日曜講集 例會毎に小西、和賀、山口、中村、議部等の教務部各位が、熱誠を以て本多學系の法話を續けられて居る。

御書講座 小林先生毎火曜日晚の開目鈔講話も、いよいよ後數回で終了するであらう。遠く日原や滋谷又は老品川邊から毎回來聴する方々を見て、自ら懈怠の身に鞭撻される。

福島支部 報

七月五日 午後一時より高商生徒集會所に於て、同校讀經會休暇前

書道は合理的な健康法でありま
す。私は過去三十年の體驗から、
藝術と科學とに立脚する新時代に
適應の

健康書道法

を提唱致して居ります。場所も相
手も要らず、僅か一日十分間で字
が上達した上健康になります。お
試し下さい。
個人教授、揮毫、講演、講習會等
御希望の方は下記へ御申込願ひま
す。

東京市淺草區聖天横丁二七

吉川郁子方

夏 谷 江 南

團費誌料寄附及維持費領收 (自六月二十一日 至七月二十一日)

編輯室より

五四

一金拾 圓也 東京 柴田 武治殿 一金貳圓貳拾錢也 紀州 乾 市殿
 一金拾六圓貳拾錢也 同 順 道 會殿 一金貳圓五拾錢也 千葉縣 川村 善助殿
 一金壹 圓也 同 小峰 豊子殿 一金六 圓也 東京 和賀 謙介殿
 一金四拾貳錢也 同 同 深澤 勝善殿 一金五 圓也 同 高木 錦三郎殿
 一金拾 圓也 千葉縣 石川 忠一郎殿 一金四圓四拾錢也 同 水島 三郎殿
 一金六圓八拾錢也 津山 林 顯太郎殿 一金參 圓也 同 大原 行道殿
 一金貳圓貳拾錢也 東京 西田 力殿 一金五 圓也 同 小西 日喜殿
 一金貳圓貳拾錢也 同 笠原 花子殿 一金四圓五拾錢也 同 笠岡 信語殿
 一金五 圓也 山梨縣 山本 禮三郎殿 一金四圓四拾錢也 富山 石原 重太郎殿
 一金貳圓五拾錢也 東京 深澤 紀文殿 一金拾 圓也 東京 小川 吉助殿
 一金貳圓貳拾錢也 同 同 福原 修殿 一金五 圓也 同 酒井 藤吉殿
 一金貳圓貳拾錢也 神戶 廣木 月子殿 一金貳 圓也 同 加藤 重太郎殿
 一金拾 圓也 名古屋 小菅 三郎殿 一金貳圓五拾錢也 同 上田 曼弘殿
 一金貳圓五拾錢也 東京 鈴木 二光殿 一金壹 圓也 愛知縣 白井 勢市殿
 一金貳圓貳拾錢也 同 同 三橋 會要殿 一金八 拾 錢也 東京 日下部 二葉殿
 一金九圓四拾錢也 名古屋 林 幸太郎殿 一金五 圓也 同 山口 智光殿
 一金貳圓五拾錢也 福島 岩井 露殿 一金貳圓貳拾錢也 岡山縣 岡野 コキロ殿

〇七八月はお盆の月ですから、大藏經要義編纂の中から特に孟蘭盆經を摘出させて載せました。不統一な放送に惑ふことなく、充分御精研を望みます。

〇要綱摘要は短篇ですが、肝要を得たもの、殊に妙信の滅罪觀は之に依つて教はる方もありでしょう、其他「宿作因」に就ても大事な教義が演べられて居ます。

〇法華經の二大眼目たる小乘教徒への授記と本佛の光顯は開目抄に最も力説されて居る、大事の法門ですからそのお積りで……。

〇大暑の折柄、各位の御信心倍増を念願致します、同時に北支派道將士の御健闘をお祈り致して居ます。

右雜有入帳仕候也

財團法人統一團會計

金勝陀羅尼品第八

重顯空性品第九

四天王護持人天品第十一

爾の時に、世尊、重ねて空性を明かにし、頌を説いて曰はく、

我れ己に餘の甚深の經に於て

廣く眞空微妙の法を説きぬ

今復た此の經王の内に於て

略して空法の不思議を説かん

當に知るべし此の身は空聚の如し

六賊依正して相知らず

六塵の諸賊は別に根に依れり

各相知らざる亦是の如し

常に色聲香味觸を愛し

法に於て尋思し暫くも停ることなし

皆虚妄の分別より生ず

譬へば機關の業に由りて轉ずるが如し

【六賊】 色聲等の六塵、眼耳鼻等の六根を縁として功能の法財を劫奪すれば賊となす。

依空滿願品第十

善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲せば、眞に

異し俗に異し、思量すべきこと難し。凡聖の境に於て、體一異に非ず俗を捨てず、眞を離れず、法界に依り菩提の行を行ず。

我れ往昔に於て菩薩の道を行ぜるとき、猶ほ勇士の戰陣に入るが如し、身命を惜まず、是の如き微妙の經王を流通し、受持し讀誦し他の爲めに解説す。

【阿耨多羅三藐三菩提】 無上正眞道、無上菩提ともいふ。佛の覺智圓滿のこと。

四天王觀察人天品第十一

世尊、是の經を以ての故に、我等四王皆共に、一心に是の人王及び國の人民を護り、災患を離れ常に安隱なることを得せしむ。

金光明最勝王經卷第六

四天王護國品第十二

爾の時に、世尊は四天王の金光明經を恭敬し供養し、及び能く諸の持經者を擁護すること
を聞こしめし讚めて言はく、善い哉、善い哉、汝等四王よ、若し人王有つて此の金光明最
勝經典を恭敬し供養せば、汝等應當に勤めて守護を加へ安隱を得せしむべし。
爾の時に、四天王、即ち佛に白して言さく、世尊よ、若し彼の國王、此の經典に於て至心
に聽受し、稱歎し、供養し、并に復た是經を受持する四部の衆に供給して深心に擁護し衰
惱を離れしめむに、是の因縁を以て、我れ彼の王及び諸人衆を護り、皆安隱にして憂苦を
遠離し、壽命を増益し、威徳を具足せしめん。諸の人王等、各其國に於て諸の快樂を受け
皆自在を得、所有の財寶豊足し、受用し、相侵奪せず、彼の宿因に隨つて其の報を受け、
惡念を起して他國を貪求せず、咸く少欲利樂の心を生じ、鬪戰繫縛等の苦有ること無し、

其の土の人民は自ら愛樂を生じ、上下和穆すること猶ほ水乳の如く、情相愛重し、歡喜遊戯し、慈悲謙讓にして善根を増長せん。

是の諸の人王、若し能く至心に是の經を聽受せば、則ち廣大稀有の供養をもて、我が釋迦牟尼應正等覺を供養すと爲す。若し我を供養せば、則ち是れ過去、未來、現在の百千俱胝那庾多の佛を供養するなり。若し能く三世の諸佛を供養せば、則ち無量不可思議の功德聚を得ん。是の因縁を以て汝等應當に彼の王の后妃眷屬を擁護して衰惱無なからしむべし、及び宮宅神は常に安樂を受け、功德思ひ難し。是の諸の國王の所有の人民亦種種の五欲の樂を受け、一切の惡事は皆消殄せん。

爾の時に、四天王、俱に共に合掌して佛に白して言さく、世尊、若し人王有つて其の國土に於て此の經有りとは雖も、未だ常に流布せず、心に捨離を生じ、聽聞することを樂はず、亦供養し尊重し讚歎せず。四部の衆、持經の人を見て亦復た能く尊重し供養せず、遂に我等及び餘の眷屬無量の諸天をして、此の甚深の妙法を聞を得ず、甘露の味に背き正法の流を失ひ、威光及び勢力有ることなく、惡趣を増長し、人天を損滅し、生死の河に墮ち、涅槃の路に乖かしむ。世尊、我等四王並に諸の眷屬及び藥叉等、斯の如き事を見て、其の國

土を捨て、擁護の心無し、但だ我等が是の王を捨棄するのみならず、亦無量の國土を守護する諸天善神あるも悉く皆捨て去らん。既に捨離し已らば、其の國當に種種の災禍有りて國位を喪失すべし。一切の人衆に皆善心無く、惟繫縛殺害有りて瞋諍し、互に相讒謔し擗けて無辜に及ばん。疾疫流行し彗星數出て、兩日並び現じ博蝕恒無く、黑白の二虹は不祥の相を表はし、星流れ地動じ、井内に聲を發し、暴雨惡風時節に依らず、常に飢饉に遭ひ苗實成らず、多く他方の怨賊の侵掠あり、國內の人民諸の苦惱を受け、土地に可樂の處有ること無し。世尊、我等四王及び無量百千の天神、並に國土を護る諸の舊善神、遠く離れ去る時、是の如き等の無量百千の災怪と惡事とを生ぜん。世尊、若し人王有つて、國土を護り常に快樂を受けんと欲し、衆生をして咸く安隱を蒙らしめんと欲し、一切の外敵を摧伏するを得て、自國の境に於て永く昌盛を得んと欲し、正教をして世間に流布せしめ、苦惱惡法を皆除滅せしめんと欲せば、世尊、是の諸の國主、必ず當に是の妙經王を聽受すべし。亦應に經を讀誦し受持するものを恭敬し供養すべし。

瞻部洲一切の國主及び諸の人衆をして、世間の所有の法式、國を治め、人を化し、勸導の事を明了ならしむ。此の經王流通の力に由るが故に、普く安樂を得。此等の福利は、皆是

れ釋迦大師、此の經典に於て廣く流通を爲す慈悲力の故なり。世尊、此の因縁を以て、諸の人王等は皆應に此の妙經王を受持し供養し恭敬し尊重し讚歎すべし。何を以ての故に、是の如き等の不可思議殊勝の功德ありて、一切を利益すればなり。是の故に名けて最勝經王と曰ふ。

時に、四天王、妙伽他を以て、佛の功德を讚む、

佛面は猶ほ淨滿月の如く

亦た千日の光明を放つが如し

目は淨く脩廣なる青蓮の若く

齒は白く齊密にして珂雪の猶し

佛徳は無邊にして大海の如く

限り無き妙寶其の中に積む

智慧の徳水は鎖りて恒に盈ち

百千の勝定咸く充滿す。

世尊、亦た伽他を以て之に答へて曰く、

此の金光明最勝經は

無上十力の説く所なり

汝等四王常に擁護して

應に勇猛不退の心を生ずべし

金光明最勝王經卷第七

無染著陀羅尼品第十三

如意寶珠品第十四

爾の時に、觀自在菩薩、佛に白して言さく、世尊、我れ今亦た佛前に於て略して如意寶珠神呪を説いて諸の人天に於て大利益を爲し、世間を哀愍し、一切を擁護し、安樂なることを得せしめん。

大辯才天女品第十五之一

金光明最勝王經卷第八

大辯才天女品第十五之二

大吉祥天女品第十六

大吉祥天女增長財物品第十七

堅牢地神品十八

僧慎爾耶藥叉大將品第十九

正法正論品第二十

爾の時に、此の大地神女、名を堅牢と曰ふ。佛に白して言さく、世尊、諸國の中に於て人王と爲る者、若し正法無くば國を治め衆生を安養し及び長く勝位に居ること能はず、惟願くは世尊、慈悲哀愍して當に我が爲めに王法正論治國の要を説き、諸の人王をして法を聞くことを得、已に如説に修行し正しく世を化し、能く勝位をして永く安寧を保たしめ、國內の人民をして咸く利益を蒙らしめたまふべし。

爾の時に、世尊、大衆の中に於て、堅牢地神に告げて曰はく、汝當に諦かに聽くべし、過去に王有り、力尊幢と名づく。其の王に子有り。名けて妙幢と曰ふ。灌頂の位を受けて未だ久しからざる頃、爾の時に、父王、妙幢に告げて言く、王法正論有り。天主教法と名づく即ち其の子の爲めに、妙伽他を以て正論を説いて曰く、

我れ王法論を説いて

諸の有情を利安す

世間の疑を斷じて爲めに

衆の過失を滅除せん、

往昔諸の天衆

集りて金剛山に在り

四王座より立ちて

大梵に請問す

梵主最勝尊

天中の大自在

願くは我等を哀愍して

爲めに諸の疑惑を斷ぜよ

云何んが人世に處して

名けて天たるを得む

復た何の因縁を以て

號名けて天子と曰ふや

云何んが人間に生れて

獨り人主と爲ることを得む

云何んが天上に在つて

復た天主と作ることを得む

是の如く護世間 (四王のこと)

彼の梵王に問ひ已る

爾の時に梵天王

即便ち彼れの爲めに説く

護世汝當に知るべし

有情を利せんが爲めの故に

我れに治國の法を問ふ

我れ説かん應に善く聽くべし

先の善業の力に由りて

天に生じて王と作ることを得

若し人中に在りては

統領して人主と爲る

諸天共に加護す

既に母胎の中に至れば

生れて人世に在りと雖も

諸天護持するに由りて

國人悪業を造るも

斯れ正理に順ずるに非ず

若し悪を見て遮せずんば

遂に王の國內をして

王國中の人の造惡を

三十三天衆は

此れに因て國政を損し

他の怨敵に侵され

居家及資具

種種の誑誑を生じて

然して後に母胎に入り

諸天復た守護す

尊勝の故に天と名づく

亦天子の名を得

王捨て、禁制せざれば

治損して當に法の如くすべし

非法便ち滋長して

奸詐日に増して多からしむ

見て遮止せざれば

咸く忿怒の心を生ず

誑偽世間に行はれ

其の國土を破壊す

積財皆散失し

更互に相侵奪す

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版 賜天覽	特價共	金壹圓八拾錢
法華經要義	全	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	全	全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	全	全	金貳圓九拾錢
眞理の基礎に樹つ佛教の信仰	全	全	金拾五錢
法華經要品	全	全	金五拾錢
日生上人レコード(四面)	全	全	金參圓廿五錢
日蓮聖人	全	全	金拾錢
本尊意識に就て	全	全	金貳拾錢
釋尊の八相成道	全	全	金貳拾錢
法華經の心髓	全	全	金壹圓五拾錢
機部講事講解	全	全	金壹圓七拾錢
本多日生上人	全	全	金拾錢
勸行作法	全	全	金壹圓
河合妙明著	全	全	金壹圓
皇道と日蓮主義	全	全	金壹圓

月刊「教」誌

申込所

東京市小石川區音羽町六丁目
振替口座東京一〇九四〇番

「教」

發行所

定價一冊 金壹圓
送一年前共 金壹圓貳拾錢
送一年前共 金壹圓貳拾錢

東京市小石川區音羽町六丁目
財團法人 統一部
番〇二四九京東替振

注意

昭和十二年七月廿七日 印刷納本
昭和十二年八月一日 發行

(第五百九號)

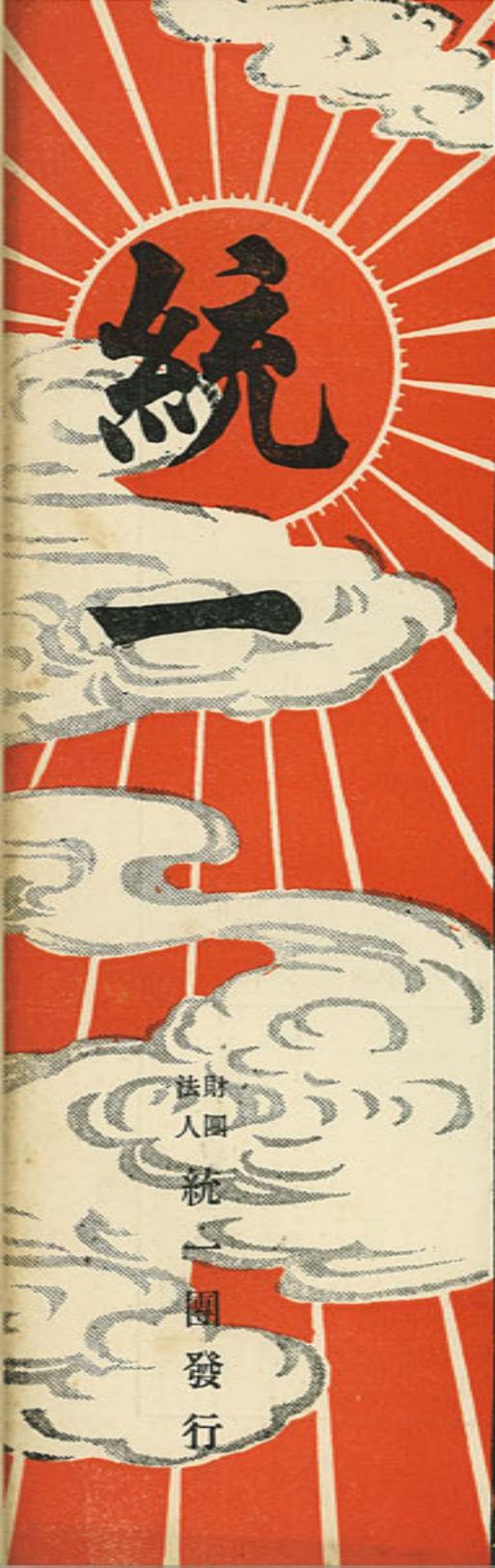
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
通知ノ事

不許複製

編輯者 磯部滿事
發行人 東京市四谷區内藤町一
印刷人 山田英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番

發行所 財團法人 統一部

東京市小石川區音羽町六ノ十七
電話牛込五三三三六番
振替東京九四二〇番



次 目

聖訓摘要	本多日生
日蓮宗概観(其九)	梶木顯正
思想の三綱格	橋本辰居
題目寸言抄	林郁夫
延山偶成	金子生
開目鈔講話(第十一講)	小林一郎
大なる悦と歡(下篇)	まじ
記事	
○本部附報	
大藏經要義續篇(其六)	本多日生
○誌料領收	
○編輯室より	